

## ノーベル賞受賞の歴史を追う

荒野 喆也

今年も恒例のノーベル賞受賞が発表され、物理学賞を真鍋博士が受賞された。真鍋博士の受賞は、日本の自然科学系部門では、二十五人目であり、米・英・独・仏に次いで五位の成績である。中でも二十一世紀にはいつてからは、十九人目で米国に次いで二位である。

ノーベル賞は、一八九六年に発足して、その一回目の医学賞に日本の北里柴三郎が候補者に挙げられていたという。同氏はペスト菌の発見者で受賞必須と言われていたが、最後になりドイツのベーリングになった。ベーリングと北里とは同時に受賞したコッホ博士の研究室の同僚であり、ベーリングの受賞理由となったジフテリア菌の血清療法の研究は、彼が北里と破傷風の共同研究を行い、北里が血清療法を創案したことが原点になっているのだから本家の北里にノーベル賞が与えられても不思議ではなかった。だが当時は、現在とは比較にならないほどの人種差別があった時代であった。

また、その後、一九一一年には、野口英世が、梅毒の病原体スピロヘータを、マヒ性痴呆患者の脳から発見した。これは精神病の病理を明らかにした最初の成果である。発見した野口英世が二度ほど候補に挙がったが結局受賞できなかった。そして同時代に、鈴木梅太郎が、ビタミンB<sub>12</sub>を主成分とするオリザニンを発見しており、史上初めてのビタミン類の発見した鈴木が受賞しなかったのも理解しにくい。

また、細菌の分野では、赤痢菌を、一八九七年に志賀潔が発見しており、世界の細菌学の分野では、日本人の活躍が世界の最先端を走っていたがノーベル賞とは縁がなかった。

日本人初のノーベル賞受賞は、大戦後の一九四九年に中間子理論構想を発表した理論物理学の湯川秀樹が最初であったが、これは、自然科学で有色人種が受賞した初めての事例であった。これは、大東亜戦争によって、人種差別が通用しなくなり、続々と独立国が出てくるとノーベル賞主催国スウェーデンも適応せざるを得なくなっている。